

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：33303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25862212

研究課題名(和文) 養育者の心理傾向に着目した虐待へのポピュレーションアプローチに関する研究

研究課題名(英文) A population approach to the study of a childrearer's psychological tendencies for abuse

研究代表者

寺井 孝弘 (TERAI, Takahiro)

金沢医科大学・看護学部・助教

研究者番号：20595326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、虐待に陥りやすい養育者の心理傾向を明らかにすることを目的とした。予備調査後、虐待に陥りやすい心理傾向37項目を用いて、全国の乳幼児をもつ養育者1001名に調査を実施し、370名の有効回答を得た。データの分析は、統計解析ソフトSPSS Statistics 24を使用し、探索的因子分析(主因子法、promax回転)を行った。分析の過程で3項目を削除し、【見捨てられ不安】、【自己調整困難】、【猜疑心】、【完璧主義】の4因子構造が妥当であると考えた。虐待へのポピュレーションアプローチを行っていく際には、上記4因子に関連した養育者の言動に注目することが必要であると示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to determine the psychological tendencies of childrearsers who are prone to abuse children. Based on the results of the preliminary study, we selected 37 items representing psychological tendencies to conduct the research. The subjects were 1,001 childrearsers with infants in Japan, and there were 370 valid responses. Exploratory factor analysis (principal factor analysis, Promax rotation) using the statistical analysis software SPSS Statistics 24 was performed. Based on the analysis, we deleted three irrelevant items and classified the rest into four factors: [Abandonment Anxiety], [Difficulty with self-adjustment], [Suspicion], [Perfectionism]. The results suggested that it is necessary to pay attention to a childrearer's behaviors associated with these four factors.

研究分野：小児看護学

キーワード：虐待 予防 心理 養育者 傾向 ポピュレーションアプローチ 因子分析 家族看護

1. 研究開始当初の背景

厚生労働省の子育て支援策等に関する調査研究では、育児の現状として、父親も家事や育児を仕事と同等かそれ以上に優先させたいと希望しているが、現実には仕事を優先せざるを得ない状況にあること、子育てをしながら働く上での問題点としては「子育てに十分時間をかけられない」、「休みが取りにくい、残業が多い」ことをあげる父親が多いことを報告しており、母親の悩みとしては「仕事や自分のことが十分できない」という回答が最も多く、「子どもとの接し方に自信が持てない」、「子育てについて周りの目が気になる」などの不安感を抱える人も3割～4割を占めている¹⁾。親は、制限や不安がある中で育児をしている現状が伺える。生活場面においても、子育て生活の気がかりとして「ほめ方や叱り方」、「しつけの仕方」が上位に挙げられており、これらについて気がかりとする人の割合が増加している²⁾という報告がある。

育児に関する意識の面については、「育児のことで今までに不安なことがあったか」という問いに対し、1980年では「しょっちゅうある」、「時々ある」と答えた者の合計が62%³⁾であったものが、2003年には76%に増加していることが報告されている⁴⁾。また、5352名の親に調査した研究では育児の困難感を抱く母親は26%と報告されている⁵⁾。

育児不安や困難にとどまらず、母親の11%に「子どもを虐待しているのでは」という思いが生じているとする調査⁵⁾もあるように、育児の中で虐待を意識する場面があることを示唆している。このことは、2000年に児童虐待の防止等に関する法律が制定されたことによって「虐待」の定義が明確化され、メディアの普及により「虐待」という概念が社会で構築されてきたことによる世間の目の先鋭化が影響している

といわれ、親は世間の目にさらされ、育児不安や困難を感じながら育児している現代社会の状況が推測される。

児童相談所の虐待相談対応件数でも、平成2年度時点で1,101件であったものが平成22年度には55,152件となり、20年間で約50倍となっており、平成24年度には児童相談所で対応した児童虐待相談対応件数は66,807件と増加の一途をたどっている⁶⁾。この読み取りには「相談対応件数」であり虐待の実数ではないことを踏まえる必要があるが、育児に不安や困難を感じている親が少なからず存在していることが推測される。

よって、育児を行っている一般の養育者であっても育児不安や育児困難の状態は存在し、虐待に移行する可能性のある養育者も存在すると分かる。そのため、一般的な養育者と関わるポピュレーションアプローチを行う中で、虐待に陥りやすい養育者を把握していくことが重要となってくる。虐待のリスクアセスメントは、養育者の要因・子どもの要因・養育状況・家庭環境の状況を総合して行っている。筆者は、この中で大きな影響を与えている養育者の要因に着目し、養育者の心理的特徴を項目リストとしてまとめようと考えた。

2. 研究の目的

虐待1次予防を目的としたポピュレーションアプローチを行っていく際の手がかりとなる養育者の心理的な特徴(心理傾向)を明らかにすること。

3. 研究の方法

(1) 調査手順

全国の乳幼児のいる親を対象として、モニター型Web調査で実施した。研究の趣旨と個人情報の保護について情報を共有した株式会社クロスマーケティングが、顧客情報を基に乳幼児期の子どもがいる親を抽出

し、World Wide Web を使用し調査を依頼した。研究協力の意思がある場合に回答をしてもらい、個人情報保護と回答の拒否や中断による不利益は一切ないことを強調した。

(2) 調査内容

対象者属性：対象者の年代、子どもの数・年齢・性別、家族形態、育児環境
調査項目

・虐待に陥りやすい養育者の心理傾向：37項目（そう 違うまでの7件法）

虐待の誘因の1つである親の要因に着目し、心理的な特徴(心性)をまとめたものである。項目作成には、Bowlby に代表される「愛着スタイルは恒常性をもち、特に幼いころに身につけたものは7~8割の人で生涯にわたり持続する」と考える愛着システムを根拠とし、子ども時代に虐待状況に曝されていた者が成長と共に呈する心理行動的な特徴や概念（AC:アダルトチルドレン、DV:ドメスティックバイオレンス、複雑性PTSD）を参考として集約した。項目内容は、虐待事例を援助している専門家に確認を受け、内容妥当性が確保されている。

4. 研究成果

(1)対象者

全国の乳幼児を養育している親370名から回答を得た（有効回収率37.0%）。

(2)分析

<虐待に陥りやすい養育者の心理傾向の探索的因子分析>

全37項目について得点分布を確認したところ、天井効果や床効果はみられなかったため、ここでは項目を除外せず、全ての質問項目を以降の分析対象とした。

次に37項目に対して主因子法による因子分析を行った（SPSS Statistics 24）。固有値の変化は、12.91、2.51、2.05、1.89、1.35、1.21、1.07...であり、因子のスクリープロットでは4因子と5因子の間で大きな傾斜がみ

られた。そこで、4因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量（.350）を示さなかった3項目を分析から除外し、34項目で再度、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。なお、4因子34項目で全分散を説明する割合は47.96%であった。

第1因子は9項目で構成されており、「相手の顔をうかがう」「嫌われないよう自分のイメージに気を配る」など、他者から自分がどう見られるかということに過度に気にする内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「**見捨てられ不安**」因子と命名した。

第2因子は13項目で構成されており、「問題解決は後回しにする」「指示してくれる人がいないと不安になる」など、他者に頼りきりであったり、一時しのぎの行動をしたりする内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「**自己調整困難**」因子と命名した。

第3因子は5項目で構成されており、「他者に頼ることができない」「他者を信用することができない」など、他者を信用できない内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「**猜疑心**」因子と命名した。

第4因子は7項目で構成されており、「自分が正しいと考えていることは押し通す」「他者に細かく指示する」など、ある程度の強制力の行使や極端さを表す内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「**完璧主義**」因子と命名した。

<内的妥当性>

虐待に陥りやすい養育者の心理傾向の4つの各因子について、内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、【見捨てられ不安】 $\alpha = .899$ 、【自己調整困難】 $\alpha = .868$ 、【猜疑心】 $\alpha = .832$ 、【完璧主義】 $\alpha = .793$ と十分な値が得られた。因子分析結果をTable1に示す。

項目	因子1	因子2	因子3	因子4
因子【見捨てられ不安】9項目、$\alpha=.899$				
相手の顔色をうかがう	.891	-.015	-.001	-.106
嫌われないよう自分のイメージに気配っている	.841	.125	-.056	-.100
他人の気持ちや意向に気を配る	.820	-.125	-.039	-.046
周囲の期待に沿うように振る舞う	.714	-.028	.070	-.024
他人に気を遣い過ぎて疲れる	.656	.088	.086	-.041
他人にどう思われるかが重要である	.644	.175	-.061	.045
起こっていないことでも心配になる	.468	.107	.112	.129
他人からの承認と賞賛を求める	.385	.217	-.278	.349
自分のせいではないかと考える	.380	.189	.237	.027
因子【自己調整困難】13項目、$\alpha=.868$				
問題解決は後回しにする	-.076	.811	-.048	-.099
指示してくれる人がいないと不安になる	.270	.647	-.152	-.112
責任を負わなければならない状況は避ける	.135	.583	-.054	-.004
気持ちや思いと裏腹なことを話す	.025	.573	.143	.136
自分の感情が分からない	.044	.563	.306	-.164
他人のせいにしてがちである	-.058	.543	-.107	.366
責任感が強い	.475	-.520	.090	.306
相手が腹を立てそうなことをわざとずる	-.340	.499	.007	.296
一つの行動にこだわり他の選択肢には目が向かない	-.100	.473	.112	.361
何をやってもうまくできないと思う	.131	.426	.249	.058
問題発生時、被害を受けることが多い	.056	.411	-.157	.098
自分だけを理解してくれる人を求める	.188	.380	-.084	.274
自分の進む道を必ずしも自分で決めていないと感じる	.181	.366	.068	-.067
因子【猜疑心】5項目、$\alpha=.832$				
他人に頼ることができない	-.034	-.106	.850	.036
他人を信用することができない	-.059	-.086	.792	-.168
自分の気持ちや考えを打ち明けられない	.025	.161	.758	-.150
他人を警戒する	.083	-.154	.720	.144
感情を表に出さない	-.038	.298	.461	-.364
因子【完璧主義】7項目、$\alpha=.793$				
自分が正しいと考えていることは押し通す	-.150	-.052	-.025	.780
他人に細かく指示する	.008	-.126	-.012	.618
衝動的に怒りを周囲にぶつけることがある	.047	.199	-.136	.604
物事は白か黒かのような2つに分けられる	-.010	-.003	.247	.427
まどろっこしい行動にイライラする	.216	.016	-.008	.382
ほどほどにできない	.063	.146	.219	.359
理想と違う自分は許せない	.058	.136	.275	.349
因子間相関				
	0.60	0.51	0.49	
	-	0.56	0.57	
		-	0.50	

以上の探索的因子分析によって得られた結果は、虐待に陥りやすい養育者を把握するための示唆を与えると考える。ただし、前述したように虐待発生の誘因に関しては、親の要因だけではなく子の要因、環境要因があるため、単純にこの項目リストの得点が高ければ、その養育者が虐待予備軍であると判断することは厳に慎む必要がある。

看護への活用としては、一般の養育者に関わる中で虐待に関するアセスメントもしていく必要のある看護師や保健師、特に新人の教育が挙げられる。4 因子として分類した養育者の心理傾向に注意して、養育者に関わることで虐待に陥りやすい養育者の把握に寄与できる可能性があり、因子負荷量の多い項目を頭に入れておくことで虐待予防に対するアセスメントの視点が広がる可能性がある。

< 引用文献 >

- 厚生労働省：子育て支援策等に関する調査研究（報告書概要版）
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1b.html>（2017年5月29日アクセス）。
 - Benesse 教育総合研究所：第3回子育て生活基本調査（幼児版）http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2008_youji/hon/pdf/data_02.pdf，2008。
 - 服部祥子,原田正文：乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点,名古屋大学出版会,1991。
 - 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防,名古屋大学出版会,2006。
 - 日本小児保健協会：平成22年度幼児健康度調査 速報版,小児保健研究,70(3),448-457,2011。
 - 厚生労働省：児童相談所における児童虐待相談対応件数（速報値）
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000037b58-att/2r98520000037ban.pdf>（2017年5月29日アクセス）。
5. 主な発表論文等
- 〔雑誌論文〕(計 0 件)
- 〔学会発表〕(計 0 件)
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
寺井 孝弘 (TERAI, Takahiro)
金沢医科大学・看護学部・助教
研究者番号：20595326